週に一度は大阪本局に集まってミーティングをする事になっている。ジプス局員や能力のある一般人も含めて行うものだが、終了後はいつものメンバーが集まって近況報告や情報交換という名の雑談に興じる事が多かった。その席で、ヤマトが突然言いだした。

「名古屋支局の食堂だが、担当者を変えようかと思っている」

「どういう事？」

皆が怪訝そうにヤマトに注目する。何人かの視線を受けて俺は問い返した。

「現在ジプス名古屋支局の食堂は鳥居に担当してもらっているが、メニューが少ない、ワンパターンだという苦情が出ている。このまま改善が見込めないようであれば別の人間を雇うつもりでいる」

ヤマトは何でもない事のように表情を変えずに言った。名前を出されたジュンゴはまだ事態を飲みこめていないようできょとんとしている。その背中をケイタがどついた。

「何ぼけっとしくさっとんねん。お前、首にする言われとるんやぞ」

「……ジュンゴ、クビ？」

「ヤマト、そういう事なの？」

皆も何を言えばいいのか解らないようなので、俺が代表して確認した。 普段は必要な話が終われば余計な雑談には参加しないヤマトが残っているものだから何かあるとは思ってたんだけど、こういう事だったのか。

「クビ……」

頷くヤマトは肩を落としたジュンゴに追い撃ちをかける。

「元々君の能力は戦闘向きだ。心配しなくてもジプスに残るならしかるべき仕事を与えよう」

非道な宣告に抗議したのは本人ではなく仲間達だった。

「ば、馬鹿な事言わないでよ！ ジュンゴは板前でしょ！」

「そうやで。今更別に仕事言うても……だいたい、ジュンゴに苦情って何なん？」

毎日食堂を利用している名古屋勢以外には何に対してそこまでクレームが出ているのか判らなかったようだ。オレも名古屋支局で食事を摂るのは週に一、二回だからかそう不満を感じた事は無かった。

「メニューがワンパターンって言ってたな」

「あー……確かに一般の食堂と比べるとちょっと少ないかもねー。殆ど和食しか無いし、美味しいんだけどずっとだと飽きるっていうか」

「サイドメニューが問答無用で茶碗蒸しだからじゃないの？」

現在は名古屋にいるジョーが呟き、毎日食堂を使っているアイリが続ける。

「うーん、それはどうかと思うわ。茶碗蒸しも美味しいけどたまには新鮮なお野菜のサラダとか、濃い味付けの煮物とか食べたくなるもの」